

1 文(文章)で解答する設問の答案については、次のA項の加点要素の合計から次のB項・C項の減点要素の合計を引いた得点をその設問の得点とします。ただし最低点は0点としマイナスの得点はつけません。

A

a 以下の採点基準では、模範解答をいくつかの要素に分割し加点要素とします。答案中にその加点要素に相当する部分があれば、その加点要素に配点された得点を与えます。

b ある加点要素は、その加点要素に配点された得点か0点で採点することを原則とします。たとえば5点配点された加点要素であれば5点か0点で採点することを原則とします。

ただし、その加点要素中の部分点を認める場合もあります。その場合それぞれの採点基準の中に明記されていません。

c ある要素に加点するか否かが、他の要素と無関係に決まる場合と、他の要素との関係で決まる場合があります。前者の場合は、その要素を単独採点(独立採点)すると言いその旨必ず明記されています。後者の場合は、他の要素との関係について以下の採点基準で具体的に指示されています。

d 解答通りという条件がある場合はいかなる部分点も認めません。

B

a 答案中に大きな誤読と判定される内容(語句)などがある場合は、その内容(語句)を減点要素として示されている場合もあります。

b 加点要素でも減点要素でもない部分もありえます。その部分は加点も減点もしません。

C

次に該当するものは、答案の形式上の不備として、一箇所につき1点の減点要素とします。

a 誤字。漢字などの文字の明らかな誤りは誤字とします。

b 脱字。

c 文末の句点の脱落。

※字数指定のない場合、句点の脱落は誤字とし1点の減点とします。

d その他不適切と判断せざるをえない箇所。

e 不適切な文末処理。設問の問い方に対応していない形で答案の文末を結んでいない場合は、適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備による減点要素とします。

たとえば「:とはどういうことか?」という問いに体言で結んでいないものなどは適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備とします。

また、理由が問われているのに、「から」「ので」などで結んでいないものなども適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備と見ます。

※ただし、「ことである」などの表現も「こと」などで結んでいるものと同様適切な文末処理が行われていると見ます。また、「からである。」などの表現も「から」などで結んでいるものと同様適切な文末処理が行われていると見ます。

また文末の表現を問わない場合もありますが、その場合はその都度明記されています。

D

2 日本語の表現として不適切なものは程度に応じて減点します。

3 次の各項に該当するものは、部分点の要素があっても、その設問の得点を0点とします。

a 答案が解答欄の欄外にはみ出しているもの。

b 一行の解答欄に二行以上書いた場合もその設問の得点を0点とします。

c 答案の文章が最後まで完結していないもの。

d 字数指定のある設問で、字数をオーバーしたものの。

e 字数指定のある設問で、制限字数の半分に満たない場合は「字数不足」と記し、全体×として、0点とします。この原則と異なる採点をする場合は、採点基準で指示します。

□ (評論) 文系・理系 共通問題 採点基準

(合計Ⅱ文系 50点・理系 40点)

問一 各1点(計5点)

- (ア) 衰微 (イ) 軽蔑 (ウ) 陥
(エ) 壊乱 (「潰乱」も可) (オ) 面目

問二 文系・理系 共通問題 9点 (模範解答例)

A ① 1点

A ② 2点

プラトンが真実とするものは、人類が理想とする完全なるものであるが、

B ① 1点

B ② 2点

現実が存在するものは、その理想に近づけようする過程の不完全なものであり、

C ① 1点

C ② 2点

芸術作品は、さらにそれを模倣した不完全なものであるということ。

※A・B・Cに関して部分採点

A ①「プラトンが真実とするものは」(1点) ②「人類が理想とする完全なるものであるが」(2点)

※プラトンの理想形の説明。

△②について、「完全なものであるが」は、「人類の理想とすべきもの」であることの説明がないので▲1点減点
で△1点。

B ①「現実中存在するものは」(1点) ②「その理想に近づけようする過程の不完全なものであり」(2点)

※現実の存在するものの説明。

△②について、「不完全なもので」は、「理想に近づけようとする」点について触れていないので▲1点減点で△1点。

C ①「芸術作品は」(1点) ②「さらにそれを模倣した不完全なものであるということ」(2点)

※芸術作品についての説明。

×①について、「絵画は」は具体例が一般化されていないので、×0点。

△②について、「理想の『影』である現実をさらに模倣したものである」は、比喻表現である「影」の一般化ができていないので▲1点減点で△1点。

A ① 1点

アリストテレスの考える芸術は、

A ② 2点

人間一般の運命を現し、

A ③ 2点

普遍性を持つものであるが、

B ① 1点

「警察が使う似顔」とは、

B ② 2点

個別的なものとして人間が日常的に生活をする状況を

B ③ 2点

忠実に再現しようとするものであるといふこと。

※A・Bに関して部分採点

A ① 「アリストテレスの考える芸術は」(1点)

※アリストテレスの考え方の説明。

A ② 「人間一般の運命を現し」(2点)

※アリストテレスの考え方は「人間一般を扱うもの」であることの説明。

A ③ 「普遍性を持つものであるが」(2点)

※アリストテレスの考え方は「普遍性を持つもの」であることを説明。

B ① 「『警察が使う似顔』とは」(1点)

※「警察の使う似顔」の説明。

B ② 「個別的なものとして人間が日常的に生活をする状況を」(2点)

※「警察の使う似顔」は「個別的で日常的なもの」であることを説明。

△「個々のものの『影』を」は、比喩表現である「影」の一般化ができていないので▲1点減点で△1点。

B ③ 「忠実に再現しようとするものであるといふこと」(2点)

※「警察の使う似顔」は「忠実な再現がなされること」の説明。

△「再現しようとするもの」は、「忠実であること」について触れていないので▲1点減点で△1点。

A 3点

人間は自然現象に対して、美しいものとしての意識をはじめから持っているわけではなく、

B 3点

美を創作する芸術家が作品にすることによって、

C 3点

そこにはじめて美を感じ取るようになる」と、

D 3点

美としての自然は芸術家によって創作されているという考え方。

※A・B・C・Dに関して部分採点

A 「人間は自然現象に対して、美しいものとしての意識をはじめから持っているわけではなく」(3点)

※傍線部の具体例「霧の美を人々は見なかった」を一般化して説明。

△「自然を厄介なものと思っていた」は、具体例が一般化しきれいでないのので▲2点減点で△1点。

B 「美を創作する芸術家が作品にすることによって」(3点)

※傍線部後の具体例「画家に描かれて」を一般化して説明。

△「芸術家が描くことによって」は、具体例が一般化しきれいでないのので▲2点減点で△1点。

△「人間が自然を作品化して」は、芸術家の創作であることを説明しきれいでないのので▲2点減点で△1点。

×「人間が自然を模倣して」は、芸術家の創作であることを説明してないので×0点。

C 「そこにはじめて美を感じ取るようになる」と(3点)

※傍線部後の具体例「初めて美しい霧として」を一般化して説明。

×「美しいものに変えると」は、創作の意味が失われるので×0点。

×「自然として感じられるようになり」は、創作によっていることが示されていないので×0点。

D 「美としての自然は芸術家によって創作されている」という考え方(3点)

※傍線部の言い換え。

A 2点

古代におけるプラトンとアリストテレスの芸術観は、

芸術を否定的なものに見るか肯定的なものに捉えるかという違いはあるが、

B ① 2点 B ② 2点

模倣の技術であり、

C 2点

人間にとっての普遍性に関係しているという点では共通しているが、

D 2点

これに対して、オスカー・ワイルドに代表される近代の芸術観は、

美の創造こそが芸術であり、

E 2点

それは絶対的自由を持つ天才によってなされ、

F 2点

ひたすら美を追求していくという道徳的な制約を受けないものである。

※A・B・C・D・E・Fに関して部分採点

A 「古代におけるプラトンとアリストテレスの芸術観は、

芸術を否定的なものに見るか肯定的なものに捉えるかという違いはあるが」(2点)

※古代のプラトンとアリストテレスの相違点を指摘。

B ①②「模倣の技術であり」(2点・2点)

※古代のプラトンとアリストテレスの共通点を指摘。

C 「人間にとっての普遍性に関係しているという点では共通しているが」(2点)

※古代のプラトンとアリストテレスの共通点を指摘。

D 「これに対して、オスカー・ワイルドに代表される近代の芸術観は、

美の創造こそが芸術であり」(2点)

※近代の芸術観のうち、「第一に」とされている点の指摘。

E 「それは絶対的自由を持つ天才によってなされ」(2点)

※近代の芸術観のうち、「第二に」とされている点の指摘。

△単に「天才によってなされ」は、説明が不十分であるので▲1点減点で△1点。

F 「ひたすら美を追求していく」という道徳的な制約を受けないものである」(2点)

※近代の芸術観のうち、「第三に」とされている点の指摘。

△「真実や普遍は問題ではない」は、古代の否定で現代そのものを完全には説明できていないので▲1点減点で△1点。

問一 8点

A 3点

B 1点

(模範解答例) 昨今の文化学の趨勢に相応した至極穏当な翻訳の定義ではあるが、結局は空疎なものであり、

C 2点

D 2点

簡潔に翻訳を定義しようとするれば、こうした当たり障りのない空虚な発言に行き着くほかにな

いかもしれないと考えている。

A 本文の「昨今の文化学の趨勢にも目配りの利いた至極穏当な定義」に対応する。本文そのままでもちろんOK。ほぼ同義の答案でよい。「至極」はなくてもよい。「定義」も「もの」としていてもよい。「昨今の文化学の趨勢に相応した」の要素が2点。「至極穏当な」の要素が1点。

B ここは本文の「実は何も言っていないに等しい」を承けている。本文そのままの言い方でももちろんよい。Dにも「空虚」という語があるが、ここは「何も言っていないに等しい」に対応する表現を求めている。

C 本文の「短い言葉で言い表そうとすればするほど」に対応している。ほぼ同義の説明があれば2点。

D 本文の「当たり障りのないうつろに行き着くほかない」に対応している。「うつろ」をそのまま使っても全く問題なし。「当たり障りのない」と「うつろ」について、それぞれ1点ずつ。

A 2点

(模範解答例) 原テキストと翻訳テキストの間の乖離を最小限にとどめるための翻訳の技術的操作は、表現

B 3点

の意味のみならず、響きやリズムの再現が求められ、原テキストの相似物を作り出すだけの単

D 2点

E 1点

純作業ではなく、多声的なテキストの生成を目指す、新たな文学作品を創造する営みとも言え

るものだということ。

A 本文の「翻訳の現場で迫られるさまざまな(いわば技術的)選択肢は、く(中略)く原テキストと翻訳テキストのあいだの乖離を最小限にとどめることを目的として採用される」という箇所をまとめたもの。

①「原テキストと翻訳テキストのあいだの乖離を最小限にとどめる」と②「(翻訳の)技術的操作」とに分けて、それぞれについて各1点という目安で採点する。①はほぼ同意なら許容。②は「技術的選択

(肢)」「もちろん許容する。」「操作」も「手法」「技法」「やり方」などの類義の表現も広く許容する。

B 本文の「意味だけでなく響きやリズムの再現もとめられる」に対応する。ここはこの答案の重要ポイント。多くの答案が本文をほぼそのまま使っていると予想される。もちろん本文そのままでもよい。「(表現の)意味のみならず」と同等の表現がなければ1点減点して2点とする。

C ここは本文の「たんに等価物に代わる相似物といっても」という表現に即している。ほぼ同等の表現と見なせるものは広く許容する。例えば「ただ元のテキストに似ていればよいというようなものではなく」「単に言葉を置き換えればよいようなものではなく」などは加点してよい。微妙にズレていると感じられるようなものは1点とする。

D 本文の「多声的なテキストの生成を念頭に置いた」に対応する。ここもBと同様にこの答案に必須の内容。

E 傍線部内の「すぐれて文学的かつ創作的作業」という表現を答案にもう一度示しているだけの個所だが、答案のまとめとしては必要。本文の少し後に「創造的可能性」という表現があるので、それを利用していても構わない。

A 1点

B 4点

(模範解答例) 翻訳とは、原文の表現に相応しい訳語を見つけて終わるようなものではなく、翻訳行為が抱

え込む恣意性やイデオロギー性を創造的な可能性へと開く方法について考えねばならない抽象

C 2点 D 3点

化の作業であり、自分の具体的な翻訳行為を客観的な視点から懷疑するという視点に立つこと

が求められるから。

A 傍線部と相反する内容を前提として示すもの。ほぼ同内容と判断できる答案なら広く許容してよい。

B 本文の「翻訳という行為が抱え込んでしまう恣意性やイデオロギー性を創造的可能性にむけてひらく方法について考える」に対応する。本文そのままでももちろんよい。「翻訳行為が抱え込んでしまう恣意性やイデオロギー性」に2点、「創造可能性へと開く」に2点という目安で採点する。

C Bの作業が「抽象化の作業」であることを答案に示さねばならない。それが出来ていれば2点与える。

D 本文にこれと同等の記述はないが、例えば「一日無邪気に浮かれていられたのに、気がついたらやけに疑り深くてためらいがちな翻訳者になりかかっていた」といった記述があり、それを抽象的にまとめた内容。採点に当たっては、「翻訳者が自分の翻訳行為を客観的に見つめ懷疑する」という内容が明確に読み取れるなら2点与えてよい。その時、単に「客観的に見直す」というだけで、「懷疑する・疑う」という意味が読み取れない場合は2点とする。

A 3点

(模範解答例) 人間の内奥には、様々な固有の感情を惹き起こす文字にし難い声というものが存在する。筆

B 2点

C 2点

者がイタリア語から何とか聴き取りえたと考えるその声を、日本語を使って生きる読者に、そ

D 2点

E 1点

の内面にあるものとは異なる声としてわずかでも聴き取りえるように文字に託して表現するといふこと。

A 本文のアントニオ・タブッキの引用中にある「声」についての説明をまとめたもの。「声」は人間の内奥に存在し、それがその人間に(様々な)感情を惹き起こす、という説明が読み取りうる答案は3点与える。「感情を惹き起こす」という説明がなければ1点。また、全体的外れの説明というわけではないが、稚拙で曖昧であると判断される場合は1点とする。

B Aの「声」を、筆者がイタリア語から聴き取るということが読み取れるなら、2点与えてよい。AとBの内容をまとめたような形の答案もきつと出てくると予想されるので、その場合も、A・Bの内容が明確に示しているかどうかをしっかりと吟味する。

C 傍線部の「日本語の内側にいる読者」を的確に説明した内容。「日本人」あるいは「日本(人)の読者」といった答案には点数を与えない。「日本語話者」などはもちろんOK。要するに、日本語を使っている人間ということ。

D 筆者がイタリア語からつかんだ「声」が、日本語を使っている人間の内面の「声」とし異質であるということが答案に示されているかどうかをしっかりと吟味する。明確に示されていない場合でもそうしたニュアンスが読み取れれば△1点与える。答案のどこに示されていてよい。

E このポイントは「聴き取りえるように」の個所にある。「日本語話者にも伝わるように」といった言い方でもよい。これも答案のどこに示されていてよい。

A 6点

(模範解答例) 小説家は、同時代を生きる人々が内に秘める固有の声としての感情を、表現の困難さを承知

B 3点

の上で作品に書き留める。その翻訳者は、自分が外国語の文字から天啓のごとく聴き取りえた

C 3点

と信じるその異邦人の声を、幻覚でないか疑いつつも、自分の言語によって文字化する。それが翻訳という営みである。

A 本文のアントニオ・タブッキの引用の最初の文と、それについての筆者の説明をまとめた内容である。

「わたしたちが生涯愛した人間たち」を「同時代に生きる人々」と言い換えている。その「声」は、すなわち「内面の感情」であるが、タブッキは「そうした声たちは、誰にもみせるわけにはいかない宝石箱の宝石みたいにして仕舞い込んであって」と言っているから、「内に秘める固有の声としての感情」と説明したのである。「表現の困難さを承知の上で」とは、やはりタブッキが「けれど、その声たちを、どうしたら取りもどせるというのか」と反語的に言っているところを説明したものである。筆者も、他者の声を聞き取れる瞬間は「僥倖のようにして訪れる」と言っている。要するに、Aの箇所は、タブッキが比喻や反語を使って述べている内容を、論理の言葉に置き換えたものである。その事をしっかりと意識しながら、答案の吟味に当たってほしい。

具体的には、次の二点を目安とする。

- ① 「同時代に生きる人々が内に秘める固有の声としての感情」で4点。「同時代に生きる」がなければ3点。その時、「声」がなくても「感情」とあればよい。「声」とだけあって、それが「感情」であることの説明がなければ3点。後は、説明の巧拙などを勘案しつつ適宜減点する。
- ② 「表現の困難さを承知の上」で2点。これは、ほぼ同内容の答案を広く許容してよい。例えば「ひたすら努力して」などは許容。

B 本文の「殉教に際して天使の声を聴いたと伝えられる、音楽と音楽家たちの守護聖人、聖チェーリアでもなければ叶えられそうにもない欲望」という記述を「天啓のごとく聴き取りえたと信じる」と説明したものである。「天啓」という語を使わなければならぬわけではないが、同等と見なせる説明は必須。例えば、「神から下されたかのように」「天の声をきいたかのごとく」のような説明は全て許容してよい。

C 本文の「「音声による幻覚がもたらす何もかを知覚する」という「(魔法にかかった)状態」に身をゆだねる」という記述による説明。ここも「幻覚」という語を必ず使わなければならないわけではない。同等の説明と見なせる答案は広く許容してよい。ともかく「幻覚(幻想)」という語があれば、1点与えてよい。

問一 傍線部(1)を、文意が明らかになるように、ことばを補って現代語訳せよ。【10点】

〔傍線部〕 A1この女、(B1) C1かばかりみにくき人とも知らず、D2あひそめにければ、E1くやしきこと F1取替すばかりに G1おぼえ (E・F) けれど、H2いふかひなくて明かし暮らす

〔解答例〕 A1この妻は、B1夫が C1これほど醜い男であるとも知らずに、D2逢うようになったので、F1夫を取り替えたいと思つほどに E1(結婚した)ことが(残念に G1思われた) E・F(けれど、H2どうにもしようがなくて日々を過)す

A【1点】この女、 ↓ この妻は、

※「この女は・賈氏の妻は」でもよい。「賈氏の女は」は×。主語を示す「は」がない場合は×。

B【1点】(補い) ↓ 夫が

※CもDも0点の場合は得点できない。

※この位置になく、Dの対象として「夫に」となってもよい。

※「夫」は「賈氏・結婚相手」などでもよい。

C【1点】かばかりみにくき人とも知らず、 ↓ これほど醜い男であるとも知らずに、

※「これほど」は「このように・かくも」などでもよい。これがない場合は×。

※「醜い人」は「容貌(容姿・見た目)の悪い人・不細工な人」などでもよい。「人」がない「これほど醜いと知らず」でもよしとする。

※「知らずに」は「しらず・知らなくて・気づかなくて」などでもよい。

D【2点】あひそめにければ、 ↓ 逢うようになってしまったので、

※「逢い始めてしまったので」でもよい。また、完了(してしま)う(の意がない)「逢うようになったので・逢う始めたので」でもよい。

※「逢う」は「会う・結婚する・契りを結ぶ」などでもよい。

※「くするようになる・くし始める」の意がない場合は【1点】。

E【1点】くやしき ↓ けれど、 ↓ 残念に ↓ けれど、

※「残念だけれど・くやしけれど・後悔したけれど・悔やんだけれど」などの意があればよい。【1点】。「結婚したことが」はなくてもよい。

F【1点】取替すばかりに ↓ けれど、 ↓ 夫を取り替えたいと思うほどに ↓ けれど、

※「夫を取り替えたいほどだけれど・夫を取り替えたいけれど」の意があればよい。「夫を」がない場合は×。

G【1点】おぼえ ↓ 思われた

※EもFも0点の場合は得点できない。

※「感じた」でもよい。EかFのいずれかとのつながりでこれがあればよい。自発的な意が含まれない「思った・考えた」などは×。

H【2点】いふかひなくて明かし暮らす ↓ どうにもしようがなくて日々を過す

※「どうしようもなくしていた」の意があれば、【1点】。

※「日々を過していた・暮らしていた・生活していた」の意があれば、【1点】。

問二 傍線部(2)はどのようなことを言っているのか、説明せよ。

【10点】

〔解答例〕 A2男はB3まったく物も言わず笑いもしないC2妻にD3なんとか物を言わせ、笑わせたいと思って努めたが、そのようにさせることもできないまま三年が経ってしまったということ。

※Dが0点の場合は、他は得点できない。

A【2点】 男は ※Dが0点の場合は得点できない。

※妻(女)に働きかけた人物が「男」と明らかであればよい。「男」は「賈氏」でもよい。

B【3点】 まったく物も言わず笑いもしない ※Dが0点の場合は得点できない。

※「物も言わない」の意があれば【2点】。「話さない・喋らない」などでもよい。「話せない」「でもよしとする」。

※「笑わない」の意があれば【2点】。「笑えない」でもよしとする。

※「物も言わない」と「笑わない」の両方の意があれば【3点】。

※「物も言わない」の意も「笑わない」の意もない場合で、「気がふさいでいる」の意がある場合は【1点】。

ただし、「物も言わない」の意が「笑わない」の意のいずれか、もしくは両方がある場合は、「気がふさいでいる」では得点できない。

※「物も言わない」の意も、「笑わない」の意も、「気がふさいでいる」の意もない場合は×。

C【2点】 妻に ※Dが0点の場合は得点できない。

※男(賈氏)から働きかけられた人物が「妻」と明らかであればよい。「妻」は「女」でもよい。

D【3点】 なんとか物を言わせ、笑わせたいと思って努めたが、そのようにさせることもできないまま三年が経ってしまったということ。

※「物も言わせようとしたが、できずに三年が経った」の意があれば【2点】。「物を言わせ」は「話させ・喋らせ」などでもよい。

※「笑わせようとしたが、できずに三年が経った」の意があれば【2点】。

※「物も言わせようとした」と「笑わせようとした」の両方があり「できずに三年が経った」の意があれば【3点】。

※「物も言わせようとした」も「笑わせようとした」もない場合は×。

※「できず」は「効果がなく・甲斐もなく・変化もなく」などでもよい。

※文意がスムーズであれば「努めた」はなくてよい。スムーズでない場合は適宜減点する。

問三 【10点】

「解答例」 A3もしB2野辺に出て沢のほとりにいる(A)雉を射とめることができなかったならば、C2わが妻がD1三年振りに(C)口にしたE2言葉を聞くことができたであろうか、いや、できなかったであろう。

A【3点】 きぎす得ざらましかば ↓ もし、雉を射とめることができなかつたならば、

※「射とめる・弓矢で得る」の意がなく、「得る・手に入れる」の意がある場合は【1点】。

※仮定条件で訳していない場合は×。「もし」はなくてもよい。

※「雉(きじ)」「が」「きぎす」のママになっている場合は全体からマイナス1点。

B【2点】 野沢の ↓ 野辺に出て沢のほとりにいる

※Aが0点の場合は得点できない。

※「野」の意が生かされていれば【1点】。

※「沢」の意が生かされていれば【1点】。

※ただし、右がなく「野沢の」のママである場合は【1点】。

C【2点】 妹が ↓ わが妻が、口にした

※Eが0点の場合は得点できない。

※Eの「こと」の葉「が」「妻」のものとわかればよい。「妻」は「あなた・愛しいあなた・愛する人」などでもよい。「妹・女」などは×。

※「わが」「や」「口にした」はなくてもよい。

D【1点】 三年の ↓ 三年振りに

※Eが0点の場合は得点できない。

※「三年話さなかつた」の意があればよい。

※「三年分の」は×。

E【2点】 聞かまじや、ことこの葉を ↓ 言葉を聞くことができたであろうか、いや、できなかったであろう。

※「言葉を聞くこと」はなかつた・言葉は聞けなかつた」の意があればよい。

※「ことこの葉」は「声」でもよい。

問四 【10点】

〔解答例〕 A2 『唐物語』では、B1 沢にいる雉をあつという間に射とめるほどの(A) 夫の弓の腕前がC2 妻の心をつかんだこと(A) を評価しているが、D4 『古今著聞集』では、E1 心変わりして自分と距離を置く妻に対する悲しみを詠んだ(D) 夫の歌に感動して心を許した妻の優雅さを評価している。

A【2点】 『唐物語』では、く 夫の弓の腕前が く を評価している

※「『唐物語』では、夫(男・賈氏)の弓の腕前を評価している」の意があればよい。

※「評価している」は「ほめている」などでもよい。右の内容があっても、「評価している」に相当する語がない場合は×。

B【1点】 沢にいる雉をあつという間に射とめるほどの

※Aが0点の場合は得点できない。

※「雉を射止めた」の意があればよい。

C【2点】 妻の心をつかんだこと

※Aが0点の場合は得点できない。

※「妻の心をやわらげた・妻に許された・夫婦仲がよくなった」など、「弓の腕前」が「妻・夫婦の関係」に作用したことが明らかであればよい。

※ただし、「妻に言葉を発せさせた・妻を笑わせた」は【1点】。

※「妻」は「女」でもよい。

D【4点】 『古今著聞集』では、く 夫の歌に感動して心を許した妻の優雅さを評価している。

※「『古今著聞集』では、妻の優雅さを評価している」という内容があれば【2点】。

※「優雅さ」は「優美な点・風流な点・趣深さ・情趣・風情」などでもよい。「優しさ・心遣い・立派さ」などになっている場合は【1点】。

※「『古今著聞集』では、妻が歌に感動したことを評価している」という内容があれば【2点】。「夫の」はなくてもよい。

※右の二項目が両方あれば【4点】。

※「心を許した」はなくてもよい。

※「評価している」は「ほめている」などでもよい。右の内容があっても、「評価している」に相当する語がない場合は×。

E【1点】 心変わりして自分と距離を置く妻に対する悲しみを詠んだ

※Dが0点の場合は得点できない。

※Dの「歌」の形容として「妻に対する悲しみ(嘆き)を詠んだ」の意があればよい。

問五 (a) 【3点】

〔解答例〕 A1頁の大夫のB1容貌がC1醜いこと。

※Bが0点の場合は、他は得点できない。

A 【1点】 賈の大夫の

※「大夫の」でもよしとする。「賈氏の」は×。

※Bが0点の場合は得点できない。

B 【1点】 容貌が

※Bが0点の場合は得点できない。

※「容貌」は「養子・顔・外見・見た目」などでもよい。

C 【1点】 醜いこと。

※「醜い」は「不細工」などでもよい。

※説明ができていれば、文末は「こと」でなくてもよい。

問五 (b) 【7点】

〔解答例〕 A2どのようなことであれ、何かしらB4上手にできることを持ちC1続け(B)ていたものだ、ということ。

※ 「」などの説明の有無は不問。

A 【2点】

※Bが0点の場合は、他は得点できない。

※「何であれ」の意があればよい。

B 【4点】

※「上手にできることを持っていたい・得意なことがあるのはよい・才能があるべきだ・才能は役に立つ」などの意があればよい。

※「弓矢の」などの有無は不問。

C 【1点】

※Bが0点の場合は、他は得点できない。

※「続ける」の意があればよい。「(才能を)磨き続ける」の意でもよい。